

STAGE 5. <登城>

巧みに切り替えられた

狭間からの攻撃を切り抜ける!!



シチクモン

からめて

大手と搦手の攻防線

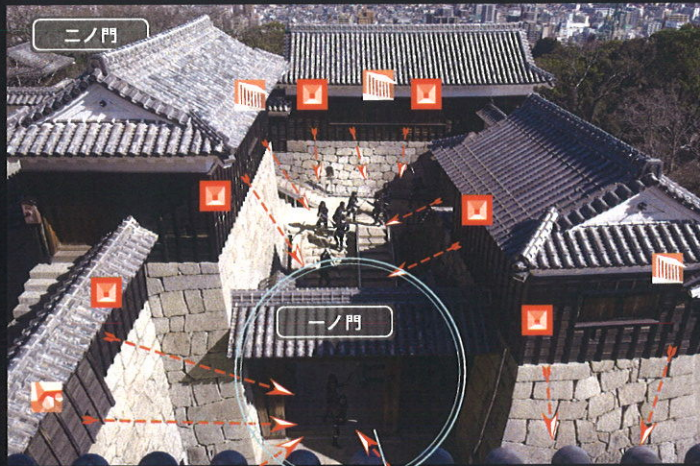
大手側(表)となる本丸広場から搦手側(裏)へと通じる紫竹門の周辺では、大手側から搦手側への侵攻、搦手側から大手側への侵攻との両方に対応した仕掛けがある。頭上の櫓には狭間や石落が備えられているのは勿論のこと、紫竹門東堀は搦手側の攻め手に対応するため狭間から正面に攻撃を受けてしまう。場所に依じて、つくりを変えた周到な構えに注意しながら紫竹門を突破せよ。



紫竹門から西に延びる渡堀は、狭間の向きが途中から逆転している。これは大手側・搦手側・本丸石垣下からと、攻め手の動向に備えられているため特に注意が必要だ。

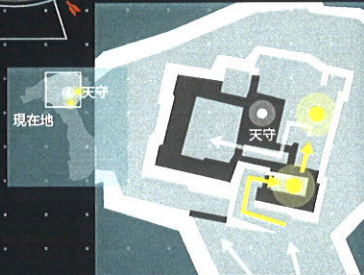
STAGE 6. <本壇>

四方八方の攻撃から身を守れ!!



イチノモン→ニノモン

一ノ門から
二ノ門の枅形



いよいよ本壇。本丸広場よりも10m高い石垣上に築かれており、入口は上り坂になっている。本壇への唯一の入口である一ノ門をくぐると、二ノ門手前に小広場となった枅形へと至る。その枅形では四方の櫓や堀からの集中攻撃を浴びせられるため、さらに勢いをつけてその場を切り抜けよ。

STAGE 7. <本壇>

二方向の侵入路に惑わされるな!!



ニノモン→テンシユ

二ノ門を
越えた
小広場



二ノ門を過ぎると、小さな広場に出る。ここから天守内部へ至るには二方向に侵入路がある。二ノ門から180度折り返し三ノ門へ進むか、天守の北側へ回り込み仕切門へと進むか、どちらの方向を選んでも背後を突かれたり、天守内部や周囲の櫓・渡堀から攻撃を受けてしまう。前後左右・頭上にも注意しながら天守へと侵攻せよ。

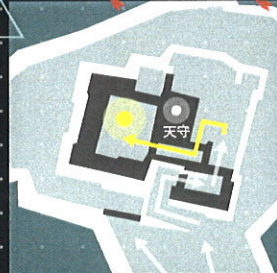
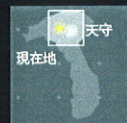
STAGE 8. <本壇>

最後の総攻撃!!弓矢・銃弾の嵐を突破せよ!!



レゾリツシキテンシユ

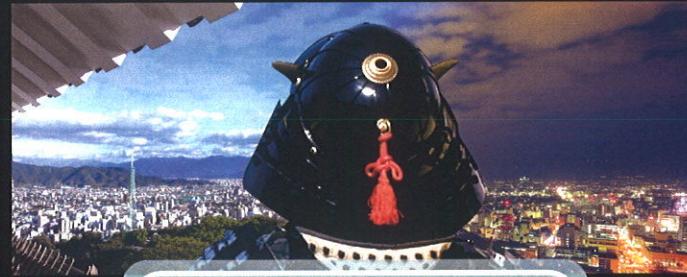
連立式天守
の中心部



ついに、本壇の最深部である連立式天守中心部の中庭まで至ると、もはや完全に逃げ道はない。四方八方から総攻撃を受け、完全に袋のネズミ状態である。厳重な防備手法であるため天守防衛の究極の姿であるともいわれる連立式天守の構造を攻略して初めて、天守内部へと足を踏み入れることができるのだ。

15.Matsuyama castle

SPECIAL <天守からの眺望>



COMPLETE!

攻略の証に記念スクリーンや写真を残そう!



よくぞ
ここまで辿りついたので

Matsuyama castle 16.

EXTRA <番外編>

山麓から攻める

現在はロープウェイ・リフトが整備され、東雲口登城道を利用することが多いが、築城時は二之丸から本丸へと通じる道は黒門口登城道のみであった。この黒門口登城道と二之丸は、石垣(登石垣)によって厳重に防衛された場所でもある。(二之丸は現在「二之丸史跡庭園」として整備)
当時の姿を思い浮かべながら、「二之丸史跡庭園」を経て、本丸を攻めるのもおもしろい。



登石垣

登石垣は、山腹を登るように築造された石垣のこと。松山城では山頂の本丸と山麓の二之丸と
の間にある広大な空間への攻め手の侵入を防ぐため、それらをつなぐ南北2本一対の登石垣が
設けられていた。その石垣上には、渡塀や二重櫓も備えられた。北側の登石垣は、明治時代以
後に破壊され一部を残すのみだが、南側の登石垣は、ほぼ完全に残り総延長は230m以上にも
及び現存規模としては国内最大を誇る。また、登石垣について通説では豊臣秀吉の朝鮮への出
兵時に日本軍によって朝鮮半島に築かれた倭城に用いられたのが最初とされている。松山城の
創設者である加藤嘉明は、出兵時の経験を松山城築城の際に活かしたものと考えられている。



松山城復元模型
(愛媛県歴史文化博物館 蔵)

二之丸

松山城の二之丸は、本丸南西の山腰を約40mの高さに伎り均し築かれた石垣上に構築される。
かつて二之丸は政務や居住のための藩邸機能があり、また渡塀・櫓・城門といった武装建築を
備えた要害堅固なものであった。現在は「二之丸史跡庭園」として、邸宅の間取りを再現し庭園
として整備し、築城時に造られたとみられる大井戸の遺構が露出展示されている。

詳しくは、松山城ホームページへ。

松山城

登城